

1 雨と虹とごはん 5

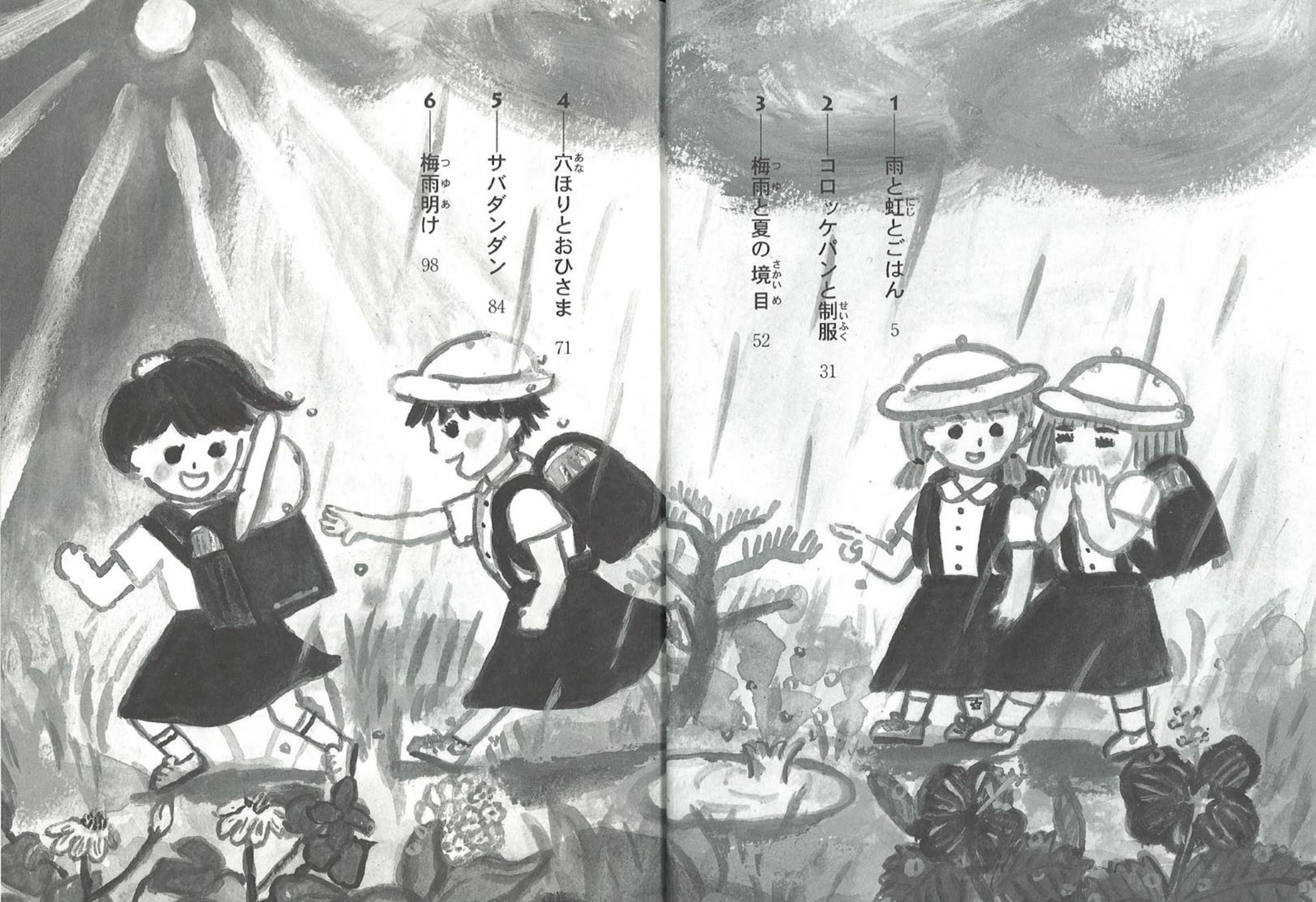
2 コロツケパンと制服 31

3 梅雨と夏の境目 52

4 穴ほりとおひさま 71

5 サバダンダン 84

6 梅雨明け 98



1 雨と虹とごはん

ドワーツという音で目がさめた。

雨だ。いっしゅん、自分がどこにいるのかわからなくなったけど、す
ぐに思いだした。

ここは、父さんの育った沖永良部島。母さんとねえさんの三人で東
京から引っ越してきて、二か月がたつ。



~~~~~ 長崎夏海 (ながさきなつみ) ~~~~~

1961年東京に生まれる。「トゥインクル」(小峰書店)で第40回日本児童文学者協会賞受賞。主な作品に「ふねにのっていきたいね」「ゆうやけごはんいただきます」(ポプラ社)、「れいとうロボット」(新日本出版社)、「ライム」(雲母書房)他。沖永良部島在住。

~~~~~ おくはらゆめ ~~~~~

1977年兵庫県に生まれる。「ワニばあちゃん」(理論社)でMOE絵本屋さん大賞新人賞、「くさをはむ」(講談社)で講談社出版文化賞絵本賞受賞。主な作品に「やきいもするぞ」(ゴブリン書房)、「子ザルのみわちゃんとうり坊」(佼成出版社)、「ふねにのっていきたいね」(ポプラ社)他。

父さんは、半年前に亡くなった。毎日おそくまでボイラーの仕事をしてきたけれど、仕事帰りにたおれてそのまま。父さんを見つけてくれた会社の人から、最後に「みへでいろ」って言ったと聞いた。「みへでいろ」は島の言葉で「ありがとう」だ。会社の人に教えたら、「ご家族への伝言だったんですね」と言ってくれた。

父さんは、ふだんは無口だったけど、島のことになるとおしゃべりになった。バナナの木を浮き輪代わりに泳いだこと、堤防から飛び込みの競争をして一番だったこと、エビを捕りに行ったこと、アダンの葉っぱで風車や船をつくったこと……。

父さんの夢は、いつかみんなで島に帰ってくらすことだった。

父さんが亡くなったあと、母さんのつとめていた小さな出版社がつぶれてしまった。土日も休まずがんばっていたのに。

母さんは仕事をさがしていたけれど、ある時こう言った。

「ね、父さんの島でくらすさない？」

あたしたちは、島に行ったことはなかった。何回か遊びに行くチャンスはあったけれど、母さんの仕事がいそがしくてダメになった。母さんは「三人で行ってらっしゃいよ」とすすめたけど、父さんは「行くときは家族全員いっしょだ」って言い合った。

「やっぱり父さんは、島のお墓にいらてあげたいの」と、母さんは言った。父さんのお骨は、まだ家においたままになっていた。

「仕事も島でなんとかかなりそうだし」

あたしは、すぐにOKした。

父さんが育った島。そしてあたしには初めての土地、初めての空気。考えただけでわくわくした。お葬式の時に会ったおじさんもやさしかったです。

四つ上のねえさんはちょっとちがった。「なにもそんな遠くに行かなくても」とか「あたしにだって計画があったのに」とかずつとぶつぶつ言っていた。中学生になったら、やりたいことがあったんだって。

あたし、ちょっとは同情したけど、「真央はお気楽でいいよねえ」ってばかにした言い方をされた時には、大げんかになっちゃった。

雨はドシャドシャふりつづいている。この島の雨はすごい。バケツをひっくりかえした、どころじゃない。天の袋がやぶけたみたいなきおいだ。うちはトタン屋根だから、雨の音がものすごくひびく。雨がふると、テレビの音も電話の声も聞こえない。

梅雨は五月にはじまって六月半ばまでつづくんだって。母さんはカビ対策がたいへんだって言ってるけど、あたしはこの雨音がすき。

目をとじると、雨につつまれている気分になる。カーテンをあけて窓の外を見たら、家の前の畑が雨にけぶってほわほわと白くなっていた。雨はあたしだけじゃなくて、島全部をつつんでいるんだね。

窓にあたる雨は、銀色のビーズがながっているみたいに見える。雨の国があるとしたら、その人たちはきっと銀色のビーズをかざった服を着ているのにちがいない。葉っぱからは、小さなずくたちが飛びおり競争をしているかも……。

ぼうつとしていたら、おながギュルンとなった。時計を見たら、昼間の十一時半。

あらら。いっくら日曜日だからって寝すぎちゃったかも。

いっしょの部屋で寝ているねえさんのふとんは、もうしまわれている。

母さんは図書館の仕事だから、るす。家中雨の音だけ。人の気配がない。

「おねえちゃん？」

